連載エッセイ 204
人生讃歌

最後の愛酒日記

【某月某日】

俳優の大地康雄さんから電話で「今日で函館での撮影終了。あす友達と日高で岩魚を釣って晩に骨酒をごちそうする」と言う。その自信満々の声に、ぼくはハハーンとうなずいた。友達は日高生まれの釣り名人・越後茂樹さんだ。大地康雄さんもアマゾン川で釣ったり稚内の川で伊富を釣る名人だ。午後七時、大地さんは三十センチの大物を二匹持って現れた。しかし大地さんは「釣れずに諦めたとき越後さんが〝あの木の根っこに二匹いる〟と言うので投げたらかかってきた。越後さんは岩魚だ。だから仲間が見えるんだ」と唸った。越後さん作の骨酒は絶品で、ぼくは六合飲んだ。酔っぱらってカラオケへ行き大地さんは北島三郎の『まつり』と『歩』を、ぼくは『函館の女』と『薩摩の女』を歌った。

【某月某日】

伊達の友人・菅俊治に呼ばれ、伊達中学校で「なぜ勉強するのか」で喋り、夜、大勢と大酒を飲む。菅俊治は会社の会長だが精神は文化的、温良すぎ、経営、儲かるのか心配だ。

【某月某日】

A市の青年大学講座で『北海道に生きて』で話す。講師四人が月に一回で、ぼくが前座の一回目でありがたい。二回目が大学教授の山口二郎、三回目が女優の岸田今日子、四回目が評論家の田原総一朗である。この顔ぶれの中では、初回のぼくの貧乏育ちの話なんか、かすんでしまう。喋らせてもらえるだけ、ありがたい。ぼくの番が済んだ夜の酒がうまかったことは、言うまでもない。

【某月某日】

札幌のキャバレー「エンペラー」での素人の歌の大会に、酒に酔った勢いで出る。生バンドが快い。ぼくは北島三郎の『歩』を歌って優勝、ハワイ旅行が当たる。審査員が、首に青筋を立ててがんばる三文小説家を哀れんでくれたのだと思う。同情だろうと慈悲だろうと、ありがたい。妻と娘と三人でハワイへ行ってきた。芸は身を助くである。

【某月某日】

石狩の友・葛西庸三さん主宰の、ぼくの作品を読む会の二十周年記念式へ。和田順義、渡辺京子ら十一人が毎月二回、石狩市民図書館へ集まり、我が拙作の朗読と感想談話を二十年、五百回近くも続けたことに驚倒する。感謝である。大酒を飲み、ぼくは得意とする『釜山港へ帰れ』を韓国語で歌って気分良好だった。三日後、岩見沢の「博酔会」へ。代表の堀利幸らが、ぼくの新刊のたび三十回も書店でサイン会をしてくれたのである。したたかに飲み、酔っぱらって『なみだ船』『星屑の街』を歌った。ぼくは幸せ者だ。

【某月某日】

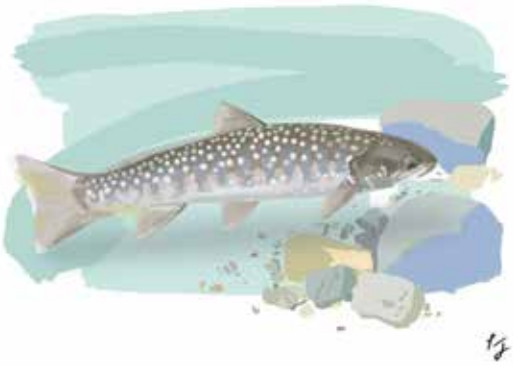
根室・別海の社長・島影輝雄夫妻と我が家で飲む。夫妻が滝上のぼくの生家そばに出来た文学碑を、四回も見に行ったというから呆れる。社長がそんなことしてて会社つぶれないかと心配だ。

【某月某日】

医師の長瀬清先生の受賞祝いの席で酒の調子を聞くと先生は「心臓の調子がねぇ」と笑った。長瀬先生には何度も講演をさせていただき酒もご馳走になった。良子夫人は、我が妻と同じ長

【小檜山 博 文学館が開館】2020年11月1日から北海道滝上町の文化センター内に、生原稿、掲載誌、文学賞、日記、写真、創作メモ、新聞記事など、70年にわたる活動資料の展示が開設されました。　紋別郡滝上町栄町（滝上町文化センター内）　☎0158・29・3735　10:00～17:00　年末年始休館（12/31～1/5）
アクセス：札幌駅からバスで約4時間30分、旭川駅からバスで約2時間30分　紋別空港から車で約40分

野の松本市出身だが、ぼくの書いたものを読んでくださっているというから、うれしい。ぼくは気が小さいから医師が神様みたいに恐ろしく近寄らないが、こっちが勝手に酒飲み友達だと思っている医師が何人かいる。作家で医師の田中良治先生には我が母を看取っていただいたほか、家族全員が四十年間お世話になり、大量の酒をごちそうになった。当然、先生に足を向けて寝るはずがない。やはり作家でもある橋本洋一先生も主治医、四十年間、医療の指示を受け、我が著書が出るたび百冊も買ってくださり、しょっちゅう大酒を付き合ってくれる。これまた足を向けて寝られない。金子貞男先生も我が主治医。病気のほか先生の名著『奇跡の物質ＡＬＡの医療革命』など難しい本を読まされている。ぼくには理解できないが友人だから仕方ない、読んでいる。先生の奥様、良子さんを会長に「小酒飲みの会」を結成、大酒を飲んでいる。ほかに医師の金子貞洋、藤堂省、戸澤修平、伊藤正敏諸先生も酒友だが、しかしやっぱり、ぼくは医師が恐ろしい。



挿絵／中江潤一

【某月某日】

晩酌の六時。今日は奮発して毛蟹で鰭酒。うまい。深い息をし、生きてるなあ、と思う。ぼくはいま、とても満ち足りた気持ちである。おカネにはずっと不自由しどおしだったし、名声とか地位にも縁がなかった。小説で少し名を知られた程度のことなど満足に思う要素ではない。ただ山腹に笹で作った豚小屋みたいな炭焼き小屋に生まれ、電気のない、豚をつぶして煮つめた油を三平皿に灯して夜の明かりにした貧農に育った光景の記憶がある。八歳のときの大晦日、貧乏がもとで父が出刃包丁を振りかざして母を追い回したとき、ぼくが父の脚にしがみついて「父ちゃんやめて、父ちゃんやめて」と泣き叫んだ記憶も鮮明である。それらの光景の中にある自分を書くことによって、ぼくは己の人生を探り続けてきたように思う。いま、この『人生讃歌』の最終回を書き終えるところである。ここに二十六年間も書かせていただいたことを感謝しつつも、拙劣なものしか書けなかったことを深く詫びる。仕事の打ち合わせと言ってよく飲んだ。飲むと歌になった。広報室長の仙北屋正明さん、社長の坂本眞一さんも歌った。なかでも小池明夫さんと島田修さん両社長の歌の、桁はずれのうまさには、たまげた。ほんとうに楽しかった。編集部の皆さんにも心から感謝する。眼を上げると、窓の向こうの明るさの残った山頂を満月が右へ動いてゆく。山裾の林で、デデッポッポーと雉鳩が鳴く。気のせいか、さよなら、と聞こえる。おいしい馬鈴薯や唐黍などの実り豊かな北海道の秋が、もうすぐだ。

【終】Ｊ

■小檜山　博（こひやまはく）：作家。神田日勝記念美術館名誉館長。1937年・北海道滝上町生まれ。『出刃』で北方文芸賞受賞。『光る女』で泉鏡花文学賞と北海道新聞文学賞受賞。1997年・札幌芸術賞受賞。2003年『光る大雪』で木山捷平文学賞受賞。2005年・北海道文化賞受賞。2007年・北海道功労賞受賞。